

教育委員会

昭和54年 7 月号 (No.347)

特集 地域社会における文化と生涯教育

- 文化行政と教育委員会
- 今期中央教育審議会を振り返って
- 文化活動圏について
- 地域における生涯教育
- 座談会 日本の文化と文化行政

7



文部省初等中等教育局地方課

教育委員会月報

7 月 号

法令用語

【労働組合】

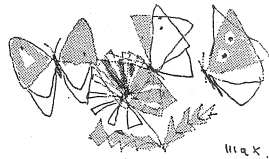
労働者が主体となって自主的に労働条件の維持改善その他経済的地位の向上を図ることを主たる目的として組織する団体又はその連合体をいう。使用者の利益を代表する者の参加を許すもの及び使用者の経理上の援助を受けるものはこれから除外される（労組法二条）。労働組合は、団体として一定の法定事項をその内容とする組合規約を定めなければならない。労働組合法は、組合要件及びこの組合規約要件を満たすものに対して、同法に定める手続に参加する資格及び救済を与えることとして、労働委員会による労働組合の資格審査制度を採用している（同法五条）。

労働組合は、使用者又はその団体との間で、団体交渉によって労働条件その他に関して労働協約を締結することができ（同法一四条）。労働協約の内容が、労働協約に定める労働条件その他の労働者の待遇に関する基準に違反する場合、その部分は無効とされ、基準の定めるところによる（規範的効力。同法一六条）。これに反して、職員団体は、労働協約を締結することができない（国公法一〇八条の五第二項及び地公法五五条二項）。職員団体との相違の主たるものの一つである。争議行為についても労働組合と職員団体はもろん異なった取扱いを受ける。このような相違は、私人間の労働関係と異なり、公務員の使用者が究極的には国民全体又は住民全体であるというその地位の特殊性に基づくものである。

地 方 課

■ 座 談 会 ■

日本の文化と文化行政



出席者（五十音順）

安 達 健 二 （国立近代美術館長）

倉 田 公 裕 （北海道立近代美術館長
明治大学文学部教授）

香 山 健 一 （学習院大学法学部教授）

森 下 洋 子 （舞踊家（松山バレエ団））

渡 辺 幹 雄 （栃木県教育委員会教育長）

（司会）

高 石 邦 男 （管理局審議官
座談会当時は初等中等教育局審議官）

一 日本の文化の現状

高石 おそろいになりましたので、「日本の文化と文化行政」についての座談会を始めさせていただきますと存じます。

「教育委員会月報」は、主として小・中・高等学校の校長、教頭、一般の先生方、それから都道府県、市町村の教育委員会の方々がお読みになっていまして、今までどちらかというと学校の経営とか管理とか教職員に身近な内容を主に取り上げてきました。しかし、最近はこの「教育委員会月報」も、毎日の教師の実践活動に直接は関係なくともその周辺にある教養的なものももっと幅広く取り上げた方がいいのではないかとということで、その方向に努力しております。今回中央教育審議会の答申をきっかけとして文化を座談会で初めて取り上げますのもそのような趣旨でございます。

そういう意味で、読む人は文化に関して専門家ではないということ、私のような全く素人がいろいろなことを伺いながら進行し、その中で文化の様々な問題を議論していただいたらどうだろうということで、私が司会を仰せつかったわけでございます。したがって司会者自身ちょっとビントの外れ

たことをいろいろ申し上げると思いますが、そこは皆様方で適宜修正願いながら進行させていただきたいと思っております。

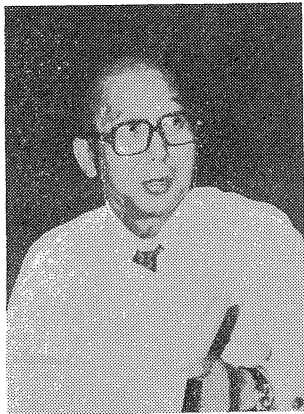
そこで、まず日本の文化についてその現状をどう考えておられるかというあたりからお話を進めていただきたいと思います。

それでは、長く文化行政を文化庁の立場でおやりいただき、日本の文化行政の草分け的な方である安達国立近代美術館長に最初にお話しいただきたいと存じます。

安達 第一に、日本の現在の文化と言われるものの特徴を内容的な面ではなく形態的な面から言いますと、日本の文化には伝統的なものと明治以来百年の間で受け入れてきたヨーロッパ的な文化というものが共存しているという点ではないでしょうかと思います。たとえば絵画については、従来の日本画の伝統にたつたもの——もちろん非常に近代化されていますが、そういうものと、明治以来受け入れた油彩画というものがある。あるいは芸能の面で言えば、能、歌舞伎、文楽のような伝統的な演劇とオペラやバレエのようなヨーロッパ的なものが共存している。従来のものが過去のものとして忘れ去られるのではなくて、なお生き続け日本人によって演じられ鑑賞されているが、しかも新しいものを受け入れているとい

うように非常に複合的な文化形態であるというところが日本の文化の一つの特徴的なことではないか。ヨーロッパにおきましても民俗芸能というものは残ってはおりまじょうけれども、それはいわば過去の遺産というふうになっているんじゃないかと、こういうことが一つ言えるんじゃないかと思いません。

それから第二に、日本は明治以来の教育制度のおかげで非常に教育が進んでおりまして、その面で文化の吸収度というものが非常に高い。特に最近テレビというものが発達しまして、日本ほど多様なチャンネルがあつてまた放送時間が長いというような国はないだろうと思ひますし、また書籍の面におきましては、恐らく日本ほどあらゆる国の文化的なものを書籍として吸収できるというところは少ないのでは



安達 健二氏

ないか。そういう意味で日本の文化は内容的にも形態的に見てもある意味では豊かで、相当充実しているんじゃないかという一つの基礎認識があると思うんです。ただ日本人のとりえ方というものが、自分のものにするというよりは、どちらかと言えば過渡的に流行に追われているようであり、本当は自分のものにまで同一化していくことについてはやはりこれからなお努力していく面があるんじゃないかと、まあ大ざっぱですけれどもそんなことをちょっと申し上げたいと思ひます。

高石 美学者であり、北海道の近代美術館の館長もなさつておいでになります倉田先生、どう現状を認識されていますでしょうか。

倉田 大変むずかしい問題ですが、それにはまず文化とは何かというところから定義していかなきやいけないんじゃないかと思うんです。仮に文化とは生活だとしてまして、それじゃ地方文化というのは本当にあるのかというところから考えていかなければならぬのじゃないかと思ひます。最近では「地方の時代」とか「地方文化の育成」とか言われますが、それはおっしゃるとおりで、地方に独自の文化をつくらなければならぬというのはそれぞれの地方に住んでいる皆さんが考えておられると思うのです。ところが一向にそれが何の



倉田 公裕氏

す。ですからそういうふうなことがあって最近ジャーナリズムなどで「文化の時代」という言葉が出てくるんだろーと思えますが、いま倉田先生がおっしゃいましたように、この中身を詰めてそれを単なるスローガンで終わらせないために何をするかというのはこれから大変大事なことにように思います。

それで、「文化の時代」ということが言われるようになった背景について私なりの認識をごく簡単に言わせていただきますと、昭和二十年代いっぱいというのは文字どおり戦後復興期で、ようやく昭和三十年頃、「もはや戦後ではない」というふうな経済白書が言っておりますように戦前水準に復帰しました。家計支出を見ますと、昭和三十一年代いっ

いはテレビとか、冷蔵庫とか、洗たく機というふうな耐久消費財の設備投資に大変忙しい時代で、日本は使い捨ての生活様式というものを恐らく世界で最も激しく取り入れた国だったように思えます。四十年代に入りますとそれからもう少し大型になって、三C製品、つまりカー、クーラー、カラーテレビというふうな大型の耐久消費財を購入する。その間に大体西欧先進国の所得水準に迫っていて、明治百年の記念式典を挙げて昭和四十三年には西ドイツを追い抜いてアメリカに次いで第二位というところまで来たわけでございますが、そのあたりから家計の消費支出や何かを見ましても文化的なものへの関心とか質の欲求というものが高まってきたように思います。

それで、私は広い意味での日本の文化の見直し、あるいは地域社会と文化という点から着目すべきだと思っておりますのは、昭和四十五年からの国鉄の「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンなんです。しかし考えてみると英語で日本の国を再発見しようとしたわけですから、まことにおもしろいキャンペーンですね。その翌年になりますとイザヤ・ベンドサンの「日本人とユダヤ人」がベストセラーとなって、日本は後進国だ、おくられているという悪口を言えばいいのが大戦後の日本文化論の一つのパターンだったのですが、そ

形にも成ってこない。その成ってこないというところに何かがあるんじゃないか、それは何だろうかという処に問題が、ありそうです。答申の中にお書きになっていらっしゃるように、文化が中央集権化している。全く地方生活というのは東京的になってしまっている。思考構造も同じになっている。例えば、某女子大学の先生が地方出身の女子学生を集めて、「あなた達はせっかく東京に出てきたんだから東京にいる間に標準語をマスターして帰るなさい。」と言ったっていうんですね。ぼくはこれはちょっとどうかと思う発言と思うんです。どうして地方語で、いわゆる地方なまりで話してどこがいけないんだと。例えば絵を見ていましていわゆる地方の言葉で描いたような絵がなくて全部標準語に直したような絵しかない。だから地方独特の絵というものが本当にあるんだらうかと、何かそういったところに大変疑問を感じるのです。答申でも、文化活動圏と、それをつくっていくためにはどうすればいいのかわからないところが問題になっていて、「何を」やるのかということがはっきりしていないんじゃないかという気がしますね。皆さんそれぞれに努力して何かをやっているが、それは一向に地方文化として結実していない。心理的に東京に近ければ近いほどいいものだと、あるいは中央文化と称するものに追従していればいいんだ

と、何かそんな風潮を感じるのです。

高石 大学で社会工学を教えておいでになります香山先生いかがでしょうか。

香山 日本の文化の現状をどう認識しているかという大変むずかしい問題ですけれども、この答申を拝見いたしました、私は内容的には大変時宜に適したもので、あとでいろいろ各論が出ると思いますが、大変適切な指摘が多く含まれているように思えます。私は最近の国民生活を見ておりますとやはり職業を問わず、年齢を問わず、地域を問わず、広い意味での文化的な欲求が非常に高まってきたということを感じます。たとえば家計の支出を見ましても、要するに広い意味での文化に関連するような支出のウェイトが近年一番伸びておる項目でございますね。

それから、私でもある研究所で文化に関するいろいろな市民団体の活動の実態を少し調べてみたことがあるのです。これはたとえば商工会議所とか、青年会議所とか、あるいはライオンズ・ロータリークラブのようなものから、アマチュア劇団、児童劇団、地方交響楽団、それからミニコミ誌のようなもので、活動の実態をずっと調べてみたんですが、それを見てもあらためてまことに多種多様な試みがあり、特にこの五年くらいの間非常に活発になっている感じがいたします



森下 洋子さん

じゃないかと思うんですけど、ちょっと構えてしまうきらいがあります。引き受ける側も劇場がないとか、東京ほどいいものはありませんなどとおっしゃいますけれども、今は決してそうでなくて、むしろ地方の方にそういう方面に対して協力的な都市もあります。やはり日本人同士ですから東京と地方というのを別にして考えないで、もっと文化活動を行っていかなくちゃいけないんじゃないかなという気がいたします。

高石 最近教育委員会の組織を見えますと文化関係の文化課とか、それから文化財保護課とか、文化面の組織が強化されている。これは末端においてそれだけの県民なり市民の文化に対する要請が強いからそういう組織がふえてきたと思うんですが、現に教育長としての立場で県民や市民の声を

のころからは、もう少し日本の文化の長所というものを、戦の後遺症を脱して見直そうじゃないかというのが出て来たと思います。そのあとオイルショックがあったりいろいろなことを通して行きつ戻りつということはあるでしょうけれども、最近では家庭においてありとあらゆる種類の手づくり、これはもう伝統的なものから戦後日本が入ってきたようなものまで大変盛んになってきております。これは生活と文化の関係で見ますと、受け身の使い捨ての生き方ではなく、料理にしろ家具にしろあるいは書道にしろ何でもいいんですけれども、やはり自分でつくるということの喜びこそが生活であり、そういうものを求めることによって初めて豊かな暮らしとか心の触れ合いのある暮らしというものができるといふことで、こういうバックグラウンドの変化があるように思うのです。それにいろいろなレベルで対応していかなくちゃならないところに来ているんじゃないだろうかと思います。

それで、いま倉田先生の方から地方と中央との関係という話が出ましたが、従来はどうしても文化的な施設にしろ、そういう文化的な欲求を充足するための供給はやはり中央とか東京に偏在していたものが、今のような全体の底上げとか高まりの中で、どの地方においてもやはり一定の水準の文化的なものに触れたいという普遍的な欲求が出てきました。しか

し同時に全国ほとんど個性がなくなったということへの反省から、それぞれの地域社会がもう一度個性を見直したいという動きがあります。普遍的な欲求と地域社会の個性とこの二つのものが非常に複雑に絡み合ってきていて、文化行政としては大変大事でむずかしいところに来ているんじゃないだろうかと、そんなところが最初の感想です。

高石 森下先生は世界的なバレリーナとして実際にやっていらつしやるし、また地方に出かけて公演なさることも多いと思いますが、そのような体験を通じてどう考えていらつしやいますでしょうか。

森下 さっき倉田先生がおっしゃったように文化というものを一体どういうふうに考えるかということですが、たとえば能とか歌舞伎とか文楽とかいう伝統文化、それから私たちのバレエのような外国から取り入れた文化、それと芸術ではなく、たとえば電気などが生活の中に入っているというようなことを指す文化があります。私の場合はやはり芸術の方面しかわかりませんが、地方と東京というものを何となく別のものとして考えていけば「構えて」しまうようなきらいがあるように思います。地方に行つて公演をする場合、東京とは何か別のものとは考えないで、もっと地方に行くのも東京でやるのも、変わりなく交流できなくちゃいけないん

直接聞かれる機会も多いと思いますけれども、そういう立場からお話をいただきたいと思っています。

渡辺 現在非常に文化面で国民の要求が高まってきたということは先生方のおっしゃるとおりでございます。私は行政の世界にいるものですから、そういう点をひしひしと感じるのはまず県議会の質問にすぐ出てくるということです。

十二名質問するうち十一名は教育と文化で、それも教育問題がかつては多かったんですが最近では文化関係が多くなったという具合です。と申しますのは、そういう質問をしないことには議員さんも一票に結びつかないということもありまして(笑) 如実にそういう面に出てきています。

それから、一般の県民の状態を見ますと、成人も一般の学生も子供も奥さんも老人も、何か社会的な会合に参加するか、家元的な芸事の団体に入っているとか、あるいは書道や音楽を習いに行くとか何か必ずやるという時間がありまして、安達先生の日本の文化にはいろいろの性格のものが混じっているというお話のとおり、そのままだとごちゃごちゃな形で混在してしかもそれが伸びつつあると思います。決して統一したり統制したりという意味じゃございませんけれども、行政の立場から筋道をつけた方向をつけてやったり整理したりというふうな意味での助長とか助成とかいうことが必要に



波辺 幹雄氏

なってくる。そのために行政の組織の面でも審議官がお話しになったように新しい課ができたり、係ができたり、そしてまた係が幾つかに細分されて、非常に文化行政が複雑になってきています。さらにまた予算の問題や指導者の問題が派生してくるわけなんです。行政の面から見た状況はそんなところでございます。

二 多様な文化活動にどう対応するか

高石 お話を承っておりますとまず文化の概念がはつきりしないと論じにくいという話でございますが、その定義づけは簡単に触れていただき、あと中央と地方の文化の格差をどう是正するか、文化の振興のために何をすべきか、行政は

どうすべきかという点についてお話を進めたいと思います。そこで、今回の中央教育審議会の「地域社会と文化について」の答申の中で文化活動についての一応の定義ということと述べているのを見ますと、これは非常に幅広く取っているんですね。国民全体の各階層に対応して教養や趣味のための学習、心身の健康のためのスポーツ、それから芸術の鑑賞や創作活動ということで、一応スポーツから芸術に至るまで幅広く教養、趣味を含めたそういうものが生活に関連する文化活動であると、こういうふうに定義づけして、それに対応する方策をいろいろ述べているようでございます。そこで今日は漠然とした、文化活動の範囲としてはそういうことにして、体育・スポーツの議論をすればまたそれだけで一つの柱となりますので、それを一応除いたその他の文化を主としてお話しただければ焦点がしぼられてくるのではないかと思います。

そこで、先ほど香山先生から国民の余暇時間がふえるとともに国民の財布から出る支出、レジャーとか文化に投入する支出がふえていったというような話がありますが、そういう点で今後国民の要求する多様な文化活動の要請にどう対応するか。文化活動というのは本来自然発生的に出てくるものじゃないかという意見がありますし、そういうものにどこまで

一体国として地方として対応できるようにすべきかというところがあろうかと思うんです。

それともう一つは、これは安達館長から話がありましたように日本には本来の伝統文化とヨーロッパから輸入された文化、さらにそれがある意味で混合し日本なりにアレンジしたものもあるということで、現在文化面でいわば質量ともに非常に幅広く国民が対応できる条件がつくられているような気がしますが、果たしてそういうものに全部対応するようにやるのがわが国の文化の振興の上で必要なのか、いろいろな問題があると思うのです。また、現在国民の持っているものもろの文化活動に自然発生的に出てきているものを全部伸ばしていくという単純な考えでいいのか、もうちょっと目的的なものがなきゃいけないのか。またこれもむずかしい質問でございますけれどもそれらの点についてお話をさせていただきたいと思います。最初に香山先生お願いいたします。

香山 これはいろいろ議論のあるところだと思えますが、私は明治維新より前にあったものだけを日本文化というふうに考えたり、あるいは伝統というものを考えるときに何かもつと前からあったものだけというふうな考え方は余り賛成しないんです。それで、たとえば最近の日本の近代技術の成果である海外に輸出をしているいろいろな商品がありますが、

ファッション製品にしても、あるいはテレビとか冷蔵庫とか自動車とかいうふうなものにしても、恐らく私もが意識している以上にはかの文化圏から見るとそこに日本の文化の表現があると思うんです。

たとえば、日本の車というのはもうすでに単なる模倣ではなくて、あの空間のつくり方というのはやはり日本独特の個性がその中にあるって、それが、欧米の車にないある居心地のよさとか親近性を感じさせているんだと思うんですね。

それから、日本でつくられたテレビ番組で「アルプスの少女ハイジ」というのがありますね。あれは私もとてもいい作品だと思っておりますが、御承知のとおりこれがヨーロッパに輸出されております。それで、これを向こうで見たドイツ人、

この人は日本語や日本の文化もわかり、日本に行き来している人ですが、彼に感想を聞きますと、たとえばアルプスに映っている花の描写の場面ですが、クローズアップして花だけをひゅつと人の会話の間にはさむ、ああいう場面は実に俳句的なセンスがあつて、それでもともとヨーロッパの物語などにある点では大変すぐれた作品に仕立て上げていて、単なる模倣ではない、むしろドイツでつくれないくらいいのものをつくっていると言うのです。まあ少し外国からの称賛というのは割引してかからなきゃいけないでしょうが(笑)、ボーゲル



香山 健一氏

が「ジャパン・アズ・ナンバールワン」と言ったときに、ナンバールワンと言われてすぐに喜ぶような心境ではありませんけれども、しかしこれはやはり一面そうだろうと思うんです。ですから、和服だけが日本の本来の文化で洋服は日本の文化ではないというふうな区別ではもうないんじゃないでしょうか。十分ヨーロッパへ輸出してヨーロッパのデザイナーと一緒にになって国際的な水準で仕事ができるファッションデザイナーの方々がたくさんいるとすれば、洋服の文化もまたすでに日本の文化的な枠の中に入ってきているんだと思うんです。ここではまさしく森下さんがそういう面で活躍しておられるわけです。呉服というのはもともと呉の服と書いていたわけですから、文化というのはいろいろな国からいろいろなものが入って来てまじり合ってつくっているもので、そういう

意味で先ほどの御質問に対して大変優等生的なお答えをするすれば、むしろいま国民が持っている関心に思う存分自由に任せて多様性を尊重するという行き方が一番大事なんではないだろうかというふうに私は考えておるんです。

いろいろな趣味、嗜好というものはまさしく人間が持っている多様性に合って文化として発展をしておりますから、相撲だって一時はもうこんなものは跡を継ぐ人がいないんじゃないかと言われた時期が戦後あったと思いますけれども、いまではむしろまた隆盛をたどっておりますし、書道の最近のブームというものは大変なものです。書道を学ばなかった時期のお母さん方が、もう三級になった、初段になったと言って、PTAの流行の一つになっている。そういう変化もありますから、私は基本的には明治維新の前のものとのものとかいうような区別をしないで、思う存分多様性を発揮させるということで考えているのですが、批判をいろいろたたきたいと思います。

安達 御意見に大体賛成なんです、やはり若干の配慮があつていいんじゃないかと思ひますのは伝統的な文化についてです。伝統的なものは放っておけば滅びるというくらいがないわけではないんですね。たとえば文楽というのは一時も本当になくなってしまいうくらいだった。ところが国立劇場

ができてそこでやりまして、皆さんご覧になってああいいものじゃないかというような認識が出て、最近のように盛んになってきているわけですね。あるいは地方の民俗芸能などもそうですが、そういう衰えんとするものを行政の面からも若干助けていく。生存させていくそのあとは国民の判断なり努力に任せる。それまでの支えだけはしていく必要があるんじゃないかと思ひますね。それに対して、十分ペイするようなものとはそれはどうしても自然に育っていくという面がありますから、行政の立場としては伝統的なものに多少配慮してやっていただくべきかなという感じはもっています。

三 外国文化の輸入と輸出

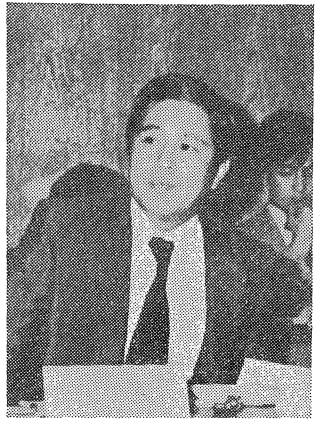
高石 それから日本では、いろいろな国のものが入り込んでしかもかなり流行するのですが、ヨーロッパ先進諸国と言われているような国々も日本と似たような現象なんではないでしょうか。日本はそういう点で異常なような感じがするような気がします……。

安達 やはり日本は一番いろいろなものの吸収力があるんじゃないでしょうか。たとえばスポーツにしても大学のクラブというのはあらゆるスポーツがありますね。ところ

がイギリスなどに行けば非常に限局されたものしかやりませんね。吸収しながら新しいものをつくっていくというのはやはり日本人のいいところだから、それはそれなりに伸ばした方がいいんじゃないかという感じは私は持ちますけれどもね。

高石 いまのお話の点は倉田先生はいかがでしょう。

倉田 非常にむずかしいことでこれも明確に答えようがないんですけども、多様性があるということは賛成ですが、さっきのお話にありましたヨーロッパにおける他国の文化の取り入れ方と、日本における文化の取り入れ方は全然違うと思うんです。向こうの方は外側から非常に固いように思うんです。取り入れないものは外側からで全部はねていきますが、入れたものは完全にこなします。ところが日本の場合は外のからはやわらかいんですね。だからどんどん入ってくるわけです。しかし一番内側にある志が割に固いんです。それで、明治百年たちまして、その外側から一応中までは入れた、しかしもう一つ中芯へはまだ溶け込んでいないんじゃないか、その溶け込む時期がそろそろ来たんじゃないかと思うんです。大体外来文化が完全に溶け込むには百五十年はかかるんじゃないかというのが私の仮説なんです。そうするともう明治百年が過ぎまして百五十年に向かっているわけ



高石 審議員

ですから、そろそろ伝統的とか近代的とか分けることなく溶け込ましていく、一応取り入れて芯の外側に置いている間にだんだんそのエッセンスみたいなものが中に溶け込んできて、先ほど香山先生がおっしゃったように独自のものとして打ち返していく、そういう時期が来ていると思うんです。

もっとも具体的な問題でいきますと、無条件にヨーロッパ的なものはずくれたものであるといって明治になってどんどん取り入れ、ヨーロッパ文化に追いつけ追い越せが明治政府以来ずっと行われてきて、そのために日本の伝統的なものをすべて切り捨てましたね。たとえば廃仏毀釈から始まりますあの運動から、いまの文楽、能、歌舞伎の問題に至るまですべてそれを外側に置いてしまった。だから学校教育において日本の伝統芸能など伝統的なものを教える時間は全然ない。

これは実は本当の多様性尊重ではないんですけれども、一種のそういう文明開化志向の行き過ぎがあったと思うんです。

それで、先ほど申し上げたように戦後アメリカナイゼーションが世界で一番進んだのが日本でございます。うんと長い目で見ると、日本というのはある時期そういうことに没頭しているときもコアの部分というのは忘れないでずっと温存してきて、またそれをもっと広い日本の文化の型の中に同化していくんだらうと思いますが、たとえば尺貫法を非合法化してみたり、あんなのは明らかに行き過ぎたと思うんですね。尺貫法とメートル法と併存させておけばかまわないわけで、皆さん洋服を着ておられても和服を非合法化しようという話にはならないのですから。

かくのごとくに、何となく明治以前のものは封建的で古くさいものというふうな議論が行き過ぎてしまつて、そのバランスを回復するような空気になってきたのが私は「ディスカバリージャパン」のあのあたりからではないかと、そういう趣旨で最初に申し上げました。もう少し自信を持って新しく取り入れたものも古い時期に取り入れたものも文化のつぼの中であつていけばよい。加藤周一さんが「雑種文化」というふうなことを言われましたけれども、私は雑種文化という

音楽は西洋音楽であり、演劇は西洋演劇であり、絵画は西洋流の描き方だということで、伝統的なものは全部外側に置いてしまい、それはあなたたちが、卒業してから勝手にやりなさいということにした。そこで文楽とか能とかが人間国宝とか文化財とかいって囲わなければ生きられないところまで来たんじゃないかと思うんです。いまここで何らかの手を打たないと結局滅びるのではないかといった危惧を懐くのですけれどもいかがでしょうか。

香山 いまおっしゃったことには私大変同感でございます。さっきは現状から将来のあり方のことをちょっと念頭に置いて、むしろ明治維新以前のものもその後入って来たものも全部多様性の中で、ある種の文化的な競争を考えたらいいということと言ったんでございますけれども、ただ、明治以来過去百年間の文化行政ということ振り返ってみますと私はやはり反省期に來ていると思つてゐるんです。というのは、やはり百年間というのは西欧先進国に追いつくということとが国家目標のかぎでございましたが、そうなりますととかく行き過ぎるのが歴史の常だとは思いますが、日本が明治以前に持っていたものは何となくいがわしいもので、時代おくれのものだといつてチョンまげと一緒にされてしまつて、それ以後入つて来たものは何か全部モダンで新しいという、

のはむしろ長い目で見てみますと世界の文化の趨勢を先取りしているんじゃないかと思つてゐるんです。

それから、またさっき御質問のほかの国のものを入れて日本だけが特殊なのだろうかということについては、一面そうだと思いますけれども、一面日本だけが特殊だということに日本人が少し過敏になり過ぎてゐるようなところもあるように思ふんです。ヨーロッパに入つてゐるものだって中近東のイスラム文化圏から入つたものがないぶんたくさんあるわけだらうと思ひますし、一体どれがオリジナルかということになると、どの国もそんなにオリジナルなものだと自慢できないような気がするんです。ヨーロッパの絵画にしたつて浮世絵の影響をうんと受けております。やはりこれからは国際的な観点で考えた上で、さっき言われたコア・カルチャーみたいなことが問題になるんで、その文化の種類がもともとどこかの国のものなのかというふうなことで議論する時期ではなくなつてきているんじゃないかと、そんな感じですよ。

高石 これも素人の考え方かもしれませんが、日本はやることよりも見る文化であつて、だからいまの日本人はあらゆるスポーツのルールを知つていて、サッカーやバレーやアメリカンフットボールを見るわけですね。しかし実際はやらない。芸術文化活動にしても鑑賞が多い。そういう余り

にも多種類のものが流れ込んでいるためにも国民は目をきよるきよるして見るだけで精いっぱいというふうな感じがするんですけれども、そういう点では倉田先生はどういうふうにごらんになっていますか。

倉田 私は日本人だけではないと思うんですけどもね。人間の知覚構造は視覚から入れるものは九〇%と言われるように目が一番発達しているわけですから、外国においてもそうだろうと思うんですよ。

それでさっきの話に戻るんですけども、結局何か文化的なコンプレックスが非常にまだ強いんじゃないか。百年たっても抜けていないんじゃないか。これは自分の体験なんですけれども、ミュンヘン工科大学の教授と雑談の中で、日本人は何を考えたのかという質問で、これはそうか、これはそうかと聞かれてみると、実は何もありません。そうすると、さっき先生がおっしゃったように受け入れたものを日本流にこなしては打ち返しているが、日本が独自に考えたたとえば電気製品とか機械製品は殆んど何もないわけです。そこで彼らははっきり言いますね、日本が明治以後に取り入れて文化にしているものを我々はもう一遍学ぶ気はないと。これはこん畜生と思っただけでそれと云われてみるとそうなんです。そして海外に知られている日本の文化というのは、

ろがありますが、これからはもう少し自信を持って、まねではなくて、それをこなしてしまっただけで表現していくというふうにしなればならぬというのは一つ言えるだろうと思います。これはやはり先ほどおっしゃったように、欧米コンプレックスが基本的にまだ抜けていないところだと思います。その辺はやはり今後の文化活動の面で大いに注意すべきではないかという感じは持っていますね。

倉田 ちょっと関連して言わせていただきますが、何か日本の取り入れ方というのは根までついてこないんですね。根のところについている土なんていうのは持ってこないで木だけ持ってくるから結局その根は全然つかないわけで、そういう模倣じゃないでしょうか。向こうの場合はさっきも安達先生が「影響」という言葉をお使いになりましたが、影響というのは精神的な模倣だと思えます。精神的模倣というのは、来たもののそのものを模倣するのではなくて、一応自分の持っている精神の中に還元してというか、フィルターを通して出していくことだと思えるのですが……。

高石 それでバレエなどは今のお話に非常に関連することだと思えますが、外国のバレエと同じものを日本人が日本の社会の中でバレエとして生かすという取り入れ方をするのか。その辺のバレエをめぐる新しい芸術と日本とのかかわ

歌舞伎であつたり浮世絵であつたりという、近世どまりなんです。その一つの例として、カナダの美術館の館長で、日本美術をやつていて日本にしょっちゅう来る友人がいるんですが、来ると東京の国立博物館へ行き、京都、奈良へ行きまして、そのまま帰るんです。「日本の最近のものを見たらどうだ」と言うんですけども、「パリとニューヨークのイミテーションはいらない」と言うのです。これは例外的なことかも知れませんが、そこに何か受け入れ方に問題があるんじゃないかという気がします。

安達 いまの関連で、先ほど香山先生から日本の浮世絵の影響の問題がりましたが、マネとかゴーギャン、ゴッホ、ドガ、みんな浮世絵の影響を受けたんですけどもただどうも違うのは、影響は受けたけれどもまねはしないというか、自分たちの方が実はすぐれているという自信とか自尊心とかがあるというか、どこから見てもまねではないという取り入れ方をしているわけですね。

それに対して日本の明治以来の取り入れ方といえ、これはルノアール調だとかいうように、一見似たようになるように勉強していくわけですね。

それは一つの民族的な取り入れ方の問題で、日本には一応先方のものになりきつてそれで自分の表現をするということとこ

り合いについて森下先生に少しお話ししたいと思ひます。

森下 やはりバレエというものは西欧のもですね。それを日本人がそのまま取り入れるというところに無理がいろいろあります。たとえば、先ほど倉田先生がおっしゃった、日本人が西欧に対するコンプレックスからまだ抜け切っていないんじゃないかということなのですが、バレエについても体のプロポーションが違うというようなコンプレックスで日本人はバレエをやってもだめなんだと考えられていました。ここ最近の若い人たちは体格もいいですし、そういう面でも決してコンプレックスを感じる必要はないと私はいつも言っているんです。

それと同時に、私のように体の小さい者でもいま海外へ出て、世界一流と言われるバレエ団にゲスト出演しています。が、先ほど香山先生が「アルプスの少女ハイジ」についてお話しなさいましたように、私も、何か外人には出せない日本人のよさというものが「白鳥の湖」を通して出てきていると言われたことがございます。これはやはり大いに自信を持って、もちろん体の面ではどんな鍛えていかなければいけません、そういうコンプレックスを一切持たないでやっていくことが私はいいことだと思うし、現実にもそういう自信を持

ってやっていっても大丈夫だけの民族性というんですか、そういうものが日本人の中にあると思うんです。

ですから、あちらの人たちのまねをする必要は一切ない、いいものはいただいてというような勉強の仕方、取り入れ方をしていた方がいいような気がしますし、私自身が経験して、決して日本人だからというコンプレックスを持つというのを皆さんに申し上げているのです。

ただ一つ、いまはここまでバレエが非常に盛んになってきましたが、一時はもう本当に子供しか見に来なかった、親戚一同しか客席にはいなかった(笑)。それが最近バレエに関係ない方でも、生活をエンジョイしたい、そして美しいものを見て少しでもいい気持ちになりたいという方がたくさん見にいらっしゃる。劇場に通うという習慣がまだヨーロッパやアメリカに比べたら足りませんが、今までは生活するだけで精一杯だったのが、少しずつよくなってきていることがこのように現われてきていると思うのです。

ところが、やっぱりこれは非常にぜいたくなことなものですから、たとえばもつと地方にも行ってそういうものを見させてさしあげたいと思っても地方にいい劇場がない。東京でも劇場をとるのに一年前から予約しなくては、公演もできない状態です。せっかく自然にそれだけの熱が上がってきたとこ

ろで、いつも自由に使える劇場があると、もつとコンプレックスもなく自然に生活の中に文化というものが入っていける状態になるんじゃないかなと思います。やはり外国では、メトロポリタンオペラハウスがある。スカラ座があるという具合に、そういうものをやるための劇場が各地にあります。日本にも是非とも必要だと思うのです。これだけ皆さんが潤いを求めて見に来て下さる中で、決して火を消すようなことをしたらいけないと思うのです。

高石 第二国立劇場が安達館長が文化庁長官のころから既に計画されて、一応具体的に土地確保の見通しはできたという状況までできたので、近いうちに……。

森下 そうですか。あとはバレエとかオペラとかいうものには果たしてどういう舞台が必要であるかというようなことを、私たちも勉強し、大いに研究し合って、せっかくできるならいいものをつくっていただきたいと思います。

高石 まだそれを育てる国民の土壌というか、観客の数とか層とか、そういうものはやっぱりヨーロッパ諸国に比べれば相当見劣りしますか。

森下 結局それは公演回数が少ないことにもよると思います。結局見たくてもたとえば一年に一回か二回しか東京ではない。地方だと一年一回行ってそういうバレエをやれば

いいというふうな状態ですから……。まあやはりどんないいものもやっていくうちに皆さんもついてきてくれるんじゃないか、今すでにそうなりつつありますから、これから大いにやっていくべきではないかと思えます。先ほどからお話のような文化的なコンプレックスが抜けないせいか、構えて見るとか構えて聞くとかいう傾向がありますが、やはりエンジョイしながらやっていくうちに結果的には文化の向上になっているというようにもっていった方がいいのではないかと思えます。自己の向上のために、勉強のためにと構えたら、これは文化も何もなくなくなってしまいうわけですから……。

高石 日本は経済大国と言われて経済面は盛んになっていますが、文化輸出というのは果たして将来どうなるとお考えでしょうか。

香山 日本は現在までのところ造船、鉄鋼あるいは自動車というふうな重化学工業製品を中心として外貨を稼いでいるわけですけれども、これから五十年、百年という単位で考えた場合、中進国、先進国との関係等々を考えていくときに、おそらくこういうものだけで外貨を稼いで生きていくというわけにはいかないと思いますから、当然現在以上のかんりのシェアをいま入超である学問、芸術などについて考えていか

なければなりません。たとえば翻訳なんていうのは、それによって外貨を相当に払って、それによって日本の黒字非難を多少免れているとすれば、現状では短期的には貢献しているかもしれないですけれども、我々の本で海外に訳されているものと、我々が海外のものを翻訳して日本に紹介しているものは完全にアンバランスであるわけです。しかしこれは長い目で変えていきたいと思っていますし、変えていく必要があるんじゃないかと思っています。

しかし、それについては私は長期的には楽観的でございます。して、日本が自動車を輸出できると思った人は恐らく三十年代初頭にはほとんどいなかったと思うんです。ウィスキーが海外に輸出できると思った人もそのころはいなかったんじゃないか。いまではワインについては信じていない人たちの方が多いと思いますが、私はいずれ国際級のワインが日本から出てくる可能性はあると思います。ワインと学問、芸術とどちらが早い、これはちょっとわかりませんがそうなるんじゃないでしょうか。

安達 私は文化の輸出は最近に現実的に行われてきていると思います。たとえば今度南ドイツで東山魁夷展というのが開催され、これは全部向こうで経費をもつて私まで招待を受けたわけですが、やはりそれだけ日本の海外における

信頼というものが出てきている。だから要は自信を持つていくべきだということが一つあると思います。

それから、その文化の輸出のために余りこちら側が悪い条件、向こう側が有利な条件で輸出をしようとあせらないことではないかと思えますね。こちら側がヨーロッパへ行けるんでしたら是非ひとつ言い、向こう側はただでさせて見てやるといふ感じにならないように、やはり対等の条件で出していくということが、結局は文化の輸出を将来伸びさせる所以ではないかと思えます。

また、輸出をするにはやはり同時に輸入もどんどん続けていかなきゃいけないと思うんですね。たとえば日本の絵画の中で、日本では非常に価値が高い場合でも、しかし一步海外に出た場合にどの程度通用するかというのは問題なので、輸入もしなければならぬ。輸入をしないとまた輸出超過で騒がれるようになるんで、やはり輸入と輸出は同時にいかなきゃいけないんじゃないかと考えております。

四 地方文化の振興とは

高石 それでは話を少し変えまして、先ほど中央と地方の文化の格差を埋めるべきだという議論もありましたが、どう

るといふことは残念だと思えます。

それで、これは私たちの経験なのですが、ある地方へ行った時、主催者側がいくら外国で踊っていらした方であっても公演は一回しか成り立ちませんとおっしゃったわけですが、ところがふたを開けてみたら、地方の方は非常にこのようなものに飢えていらしてたくさんおいでになり、千人以上の方が会場に入れないということで帰されてしまい、主催者側はもうあと二回やればよかったと言われました。初めてなのでそんなにおいでになったのかもしれませんが、それだけバレーエというものを皆さんは知っていらっしゃるわけです。ですからもっと見たいという要求がいま非常に強くなっていることですし、このような場合もっと大胆に考えてやっていただいた方がいいのではないのでしょうか。そうしないと結局二回か三回できるところが一回で終わってしまう、一回じゃ無理だからやめましょうということになってしまつて、地方で見るチャンスがなくなり、楽しむ時間も少なくなつてくるという逆方向に向かっていってしまう気がします。

高石 そして、結局生活に密着した文化、それぞれの地方の背景と特色の中で芽生えていくような文化が本来の文化であり、文化には質、量ともに格差があるのが自然な形ではないか、元々そういう面が文化にあるのではないかという問

いふことをやるのが地方文化の振興になるのかという具体的な中身になると、なかなか我々アマチュアではわからない点があります。というのは、超一流の人たちが全国にいつでもその芸を披露できるようにするという意味での地方への文化の拡散は無理ではないか、やはり国際的に誇る超一流は日本のどこかで一つか二つそれを大事に育てていかないとできないのではないかという気がするのです。そうすると東京の人は見れるが地方の人は見れないということになります。そして先ほど森下さんが地方でやるのはなかなか東京でやるのと同じようにはいかないとおっしゃっていましたが……

森下 これは決して東京と地方とで踊り手の熱意が違うということではございません。踊り手はどこでも同じ気持ちで踊ると思うのですが、地方に行く時には、それでは何人で交通費がどうのというようなことで受け入れ側は構えてしまうわけです。つまり、一回だけじゃ経費の面で成り立たない、しかし地方の人はバレーエなんか余り知らないから一回を満員にするのが精一杯でしょう、それじゃ今回はやめましょうというようなことになる。踊りのどうのこうのではなくて、そういう諸々のことがあつてせっかく地方でできるチャンスがあつても無理でしょうということになってしまふ。地方にというときまずそういうことから考えなくてはならない状態にある

題、それから一流の国立劇場のようなものを全部の地方に同じようにつくるのが地方文化の振興上必要なのかということ、さらに頻繁に公演などを見られる都会の人々と、そのように多くの機会が保証されない田舎の人々とを同じようにするのが地方文化を向上させることなのかという色々な色んな問題が、中央と地方の文化格差を議論する際にあるわけですが、一体どうするのが地方文化の振興策なのかということ、国の立場でも地方の立場でも非常にむずかしい課題ですね。それをどのように考えたらいいかを少し議論していただければと思います。渡辺先生、教育長の立場でいかがでしょうか。

渡辺 余りに大きな問題で、ちょっとどこから話していいのかわからないんですが、やはり地方でも、日本でトップレベルのもの、あるいは世界的に見ても本場にいいものを見て、いわば「なじむ」必要はあると思います。なじむ回数が多くなればなるほどそれが浸透していくだろうと思うのですが、森下先生のお話のように、なかなか場の問題とか慣習との結び付きの問題などがあつてとっつきがむずかしいでありましょう。そして、東京と私の県の宇都宮とか足利という都市の間で関係ができて、今度は宇都宮と那須の山奥との格差はどうやって埋めるかという問題も出てきます。実際問題

としてその格差を埋めるのは極めてむずかしいでしょうが、その要望は大きいと思うんです。

例えば、十八世紀、十九世紀、二十世紀三百年のフランス美術展を宇都宮でやったのがきのう終わったのですが、これは東京でやり、宇都宮でやり、北海道でやり、京都でやるそうです。

宇都宮で開かれたとき四万五千人も入ったそうで、地方都市としては非常に大成功だったのです。本当に田舎の方からも、どこまで理解しているのかわからないが要するに評判につられてやってきて見た。そういう機会が多くなるほどいいものに対するなじみは深まっていきます。だからそういう機会をつくりたいがどうやればよいか、そこが予算的な問題その他が引かかって我々の立場でもなかなかむずかしい。もっとも一概にそういうものを持って来さえすればいいということではないのですけれどもね。

森下 バレエでは文化庁の方で毎年「移動芸術祭」というのをやっていますね。全国を回るような趣旨のものがほかにあります。皆さん本当に静かに見て下さって、ものすごく温かい拍手が多いですから、やはり待つて待つて待ち抜いて見ていらっしやるというのが明らかにわかります。しかし、そのようなものを量をややすとなるとやはり……。

高石 香山先生いかがでしょうか。いまの地方と中央の文化の格差をどう考えたいか、またそれにどういうふうに対応するかということなんですが……。

香山 そうでございますね。ちょっと違った角度から発言させていただきますが、文化というところに二つの話題、つまり一つは超一流の話と、それから文化の大衆化、普及の話が出てきます。文化の普及の話をする、そんなものは超一流のものを生む地盤にならないんじゃないかという話が出て、今度超一流の方の話をしていると、すそ野がそんなものじゃ支えるだけの広さがないという話になる。この二つはちょっと分けて議論した方がいいような気がしているんです。

私は、長い目で見るとやはりすそ野が広くなれば必ず高いものを生み出すだろうという、ちょっと歴史哲学みたいなものなんですけれども、結論的にはそう思っております。たとえばいまの日本でのテニス人口のふえ方は先進国で見ても飛び抜けています。スキーなどもそうですね。しかしいまのところ国際的なテニスプレーヤーとかスキーヤーは生んでいませんが、先程倉田先生がおっしゃったように、これはやはり百年とか百五十年かかるので、この先五十年ぐらいの長い目で見ますと、小さいころからスキーやテニスをやっている者から本当に超一流の人材が生まれてくる。この五十年ぐらいが非

高石 演ずる方が地方で一ヶ月もやってくれるだろうかという、その付近の隘路もあるのでしょうね。経済的な国の援助を拡大しさえすればほとんど地方に出かけてやってくれるのだろうかということですね。

森下 そうですね、私も日本を時々留守にしてアメリカ、ヨーロッパ、オーストラリア、中国などに公演に出かけていますので余り大きなことを言えないのですが、ただそういう地方公演の話が一年前位から決まりますと、その時期は日本の皆さんにバレエを観てもらうため、是非ともと思って空けます。やはり日本でも盛んにしていかなければいけないと思いますから、そのためには東京だけでなく、北海道でも九州でもどこでもどんどん行って広めていきたいと思っています。

渡辺 ちょっと補足になりますが、文化庁の施策として「青少年芸術劇場」「子ども芸術劇場」等が全国各地で開催されていますが、これらは文化に対する子供の感覚を育てたり伸ばしたりする上で非常に効果は大きいと思います。ですからそういうものはどんどんふやしていけばいいのですが、やる場所である文化会館というような施設がまだ不十分でありまして、もっとそれをふやしていただくと非常にいいと思います。

常に大事じゃないかというふうに思っているのです。その点から見ますと、先ほどからお話があったような全国各地にある文化に対する需要と供給のアンバランスを埋めていくことがやはりとても大事なように思います。

それで、確かこれは梅棹忠夫さんが、日本では明治以来特に教育重視で文化軽視ということがあったんじゃないかというふうなことを言われて、ちょっとおもしろい表現だと思うんですが、教育はいわばチャージである、人間を充電するんだと、一方文化というのはむしろ自分なりに充電したものを放電してみる、ディスチャージだという言い方をされたことがあるんですね。ですから、その意味で文化はむしろ浪費に見える場合もあると思うんです。今までとにかく経済的に西欧先進国に追いつこうということで、充電して生産性を上げ、経済的な効率に結びつけなくちゃいけないということでしたから、やはりチャージの方に非常にウェイトをかけてきた。国家全体の予算の配分にしてもそうだったように思います。

大学でも私も見ておまして、放課後はみんな大体ディスタージしているんです。もうバンドはあちこちでじゃんじゃん鳴ってきますし、歌舞伎の練習をしているのがあるかと思うと、こっちはサッカーをやっている。それで朝の八

時半ごろから四時半ごろまではチャージの時間なんですね。どっちの方が大学のキャンパスの中は生き生きとしているかというと、放課後の方なんですね(笑)。

このようなディスチャージ、これは発信と言ってもいいと思うのですが、これは小学校から大学に至るまで従来何課外扱いしていたものですね。しかし、人間受信一方じゃやり退屈しちゃいますし、創造的な能力は落ちていくんで、受信と同時に発信することが必要です。この発信の欲求が十分満たされていないことがあるように思うのです。

ですから、これはいろいろ既に議論がなされているようですが、私は演劇をもっと学校教育の正課の中に入れてもいいし、歌舞伎や能が入ったっていいと思いますし、バレエもそうなんじゃないでしょうか。先生が教えるという、子供の立場からすると受信を中心とした活動だけでなくて、子供の方が自分で表現を試みる。その表現の仕方はいろいろな媒体があると思います。

それで、全体としてそういうふうなものが重視されていけばすそ野が広がる。すそ野が広がればかなり立派ないろんな企画がそれぞれの地域でも十分成り立つというふうな、いい循環が生まれてくるんじゃないでしょうか。

ですから、私はちょっと違った攻め口から発言させていた

か中央と地方との中間でくい止めるものがないのかということですね。そういうことで地方文化の育成に我々は頑張っているのですが、なかなか思うようにいかないんですけれども…。

高石 安達館長、いかがでしょうか。

安達 一つは、現代の日本の文化を考える場合に、地方の文化というものが別個に存在できるかどうか、私は非常に疑問だと思えますね。言語も同じですし、民族も同じ、それからテレビ、新聞によって同じような思想が植えつけられているわけですから、その地方独自の文化というようなものはやできない時代になっているんじゃないかと思えます。それならばどういふものを地方でしたらいいかという問題があります。

そこで、地方の時代と言われるならば、各地方公共団体が何かその団体なりに一つものを選んで重点的に取り入れていくというように、自分で選択していかないといけない時代ではないだろうかと思うのです。たとえば柳田国男さんで有名になった遠野というところがありますね。あの遠野市ではスタンダンサーズバレエから先生に月に一回来てもらって、子供たちに全部習わせ、発表させるといふ。何か一つの、市長さんがこれだと思うものを自分の市に取り入れてみることに

だいたんですけれども、いまピアノにしてもエレクトーンにしても恐らく先進国で例を見ないぐらいの普及で、日本はいま歴史にある時期を通過しているところですから、ここを通過した後で何か相当なものが出てくるような持っていき方をしなくてはならないのではないかと思います。

高石 倉田先生いかがでしょうか。

倉田 地方と中央の文化の格差ということは事実あると思いますが、その格差という見方にはある一つの視点しかないと思うのです。そこに問題があるんじゃないかと思えます。地方は地方の目で見て、中央、まあ私は中央という言葉はきらいなんですから、東京地方を見るといふことをしないのか。

ところが、東京というところはもう自分自身でものを創造していく力はないのではないかと私は思います。いわゆる東京文化というものは衰退期に入っていると思うのですが、つまり各地方から人材とか文化とかいろいろないいものを東京は吸収して、東京なりに加工して、それをマスコミを通じて地方に打ち返しているわけですね。だから東京のテレビ局でやる大阪弁とか秋田の芝居とかいうのは東京風に改悪されたものであって、地方でそれを見ている人は本当はあんなことは言わないのになあなと言っているわけでしょう(笑)。何

です。民俗芸能とか伝統工芸というもののだけが地方文化ということになるのでは活力がないのではないかと。これからは質としてはある程度ユニバーサルなものをどのように地方の中で吸収して自己のものにしていくかという努力をしないと、地方の文化の発展性に欠けてくるのではないかと思うのです。

それからもう一つは、東京中心ということですが、やはり文化の中心というものをもう少し多くすることですね。全国市町村にすべての文化が育つようなことをやるわけにいかないから、集中化したものをある程度の数つくっていく。そういう中で日本の文化が東京だけではない、大阪の文化もあり、九州なり中国なり四国なり、あるいは東北なり北海道の文化もあるというようになっていくべきではないか。全国一律に拡散するということも必要ですが、そのほかに集中的な拡散というものも必要ではないかと私は思うんです。

五 国、地方や学校の先生に望むこと

高石 時間が余りありませんので、この本はかなり学校の先生方に読まれていますので、学校の先生方に文化、芸術を

育てるにあたって何か御注文があるのかという点、それから国ないし地方に対してこういうことはやってもいいじゃないかというような御注文がありましたらまとめお話ししていただきたいと思います。渡辺教育長にまずお願いいたします。

渡辺 余りお金の話じゃまずいんですけれども、やはり文化施設その他、文化的な行事の予算的な面で今後とも地方に対して助成をお願いしたいと思います。

それから、市町村においても、県もそうなんですが、たとえば文化会館の運営についてのやり方が非常にいいかげんといえますか、ルールができていないんです。ということは、文化会館の運営にあたる職員がそういう専門的な知識なり能力なりを持っていないためで、職員が二、三年で異動をすることが多い状況です。ですから、そういう文化施設の運営の面についての専門的な研修をしていただく機関というものが欲しいと思います。

それから、いま最も困っているのが埋蔵文化財関係でして、いわば開発との板ばさみになっている。そうすると県の文化課だけでは県内の全部のものをとても処理できない、ということでも市町村に文化財関係の専門家を一人ずつ置いて下さいと言っても、市町村は財政規模が小さいから置けないとか、また今度は財政的な余力があってもそういう専門家が足

活動がそこで可能になってきますから、スポーツ人口がふえる、指導者も育成される。その意味で私は文化に關してもああいうような発想がこれからあってもいいじゃないかと思ひます。

そして、先ほどのお話のように、地方の今後非常に重点になるのは、答申の中でも言っているような「多極集中」ということだと思ひます。素晴らしい劇場とか、十分国際的に通用するような劇場とかとなりますと、東京だけではいけないが、これをそんな小さな市町村まで置くわけにはいきませんので、やはり多極集中ということになると思ひます。

そうしますと、これから二十年ぐらいの間に長期的な文化施設についての計画を考えていただいて、それとさっき言ったようなお祭り結びつけて、この二十年間を相当飛躍的な文化施設の充実期にする。それには劇場あり、美術館あり、博物館ありであつて、梅棹さんがこの前、ループルの三倍のものをまず東京につくつて、そしてループル程度のものを全国に五つぐらいつくりたいというような夢を語っておられましたが、そんなふうなことを考えるべきではないだらうかと思ひております。

それから、地域社会における文化活動を活発にしていくなめのいろいろなボランティアの組織化であるとか、あるいは

りないということになります。

そういうお金の問題と人の問題が、芸術振興の面でも、文化財の保護の面でもネックになっていると思ひます。そういう面で今後とも国の援助をいただきたいと思ひます。

森下 私は先ほども言いましたように、いま日本の文化の地盤というものが素晴らしく発展している段階だから、これからきつとどんな芸術方面も伸びていくであろうと期待しています。私たちも大いにがんばつて日本の文化に少しずつでも貢献できたというふうな気持ちがたくさんありますけれども、それにはやはり国の援助がどうしても必要で、自分たちだけでは限界がありますので、そのところを大いにこれから御配慮していただきたいという希望がございます。

香山 いまは特に財政は厳しいところですが、思ひ切つて文化の面に関する投資については、これから今世紀いっばいのあと二十五年は最重要項目にするというぐらゐの考え方が必要なんじゃないかと私は思つております。これは文部省の会議だから言っているわけじゃないんですけれども(笑)、そんなふうに思ひます。

たとえばスポーツを見ますと、戦後、国体をやるたびに持ち回りでハードウェアをつくつたわけですね。お祭りをやつてハードウェアをつくる、ハードウェアをつくるというんな

指導者の育成とかの面についても、この答申に出ていますのでこれを具体化していただくことが必要ではないだらうか。これまでは経済的にキャッチアップするといふことで、経済的な効率、経済的に一定の生活水準の達成が最優先できたわけですが、これからはかなり違つた感じの行政の局面に入つていくんだらうと思ひますので、そういう感覚を持つ方々をそれぞれの地域でももつと育成していただくことが大事じゃなだらうかと、そんなふうな考へております。

倉田 文化が育成されるには、香山先生がおっしゃつた、ソフトウェアとハードウェアと二つの条件があると思ひます。やはりソフトがないとハードがあつても意味がないと同時に、ハードがないとソフトも育たない。

たとえば、藤原義江さんがオペラ劇場をつくれと言われたことがあつた。ところがある人がそれを聞いて、「日本でオペラも育っていないのにオペラ劇場をつくつたって仕方がないじゃないか」と言つたときに、彼は「酒樽がないのに酒ができるか」という答えをしたということがあります。それは確かにそうなんです。だから行政の面としてはやはりハードの方を何とか少ない文化予算の中でつくつていただくと同じ時に、そういうものを活用してその地方の独自の文化を育てようという姿勢と情熱が各地方にないといけないと思ひます。

す。

そこで、教員の方々への要望ということに絡んでくるんですが、義務教育あるいは高等学校の教員というのは児童生徒に大変大きな影響力を持っているわけです。ところが美術館から見ると、団体見学、団体鑑賞というのは割に少ないわけです。これは各県みんな言えるのです。ということは、学校という教育主体の中から外へ出ていくということが非常にむずかしい状況にある。よく学校教育と社会教育の連携というのを学校教育側の方がお書きになっているんですが、我々から見たらビントはずれのことと少なくありません。せっかく生涯教育という言葉があるのなら、どうして生涯教育の基礎部分が学校教育であって、その上に社会教育——社会教育という言葉も大変問題だと思ふんですけれども、そのインテグレーションをなぜしないか、ここに大きな問題がある。だから学校の先生にまずそういう施設をいかに利用するかというのを覚えていただかなきゃいけないわけで、それに対するPRも要ると思います。

それで、結局、香山先生のおっしゃるように、やはり指導者というのは大事だと思ふんですね。やっぱり人があってこそすべてが動くんじゃないかと。まあ急に指導者養成なんていうことを言ったって、五年や十年で出てくるものじゃない

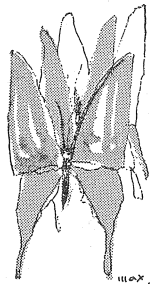
でしょうし、だから今すぐに手をつけて何とか指導者を養成していく。その指導性とか指導者そのものに対するいろんな問題があると思いますが、その養成がまず必要じゃないかと考えますね。

安達 まず教育への注文としましては、やはり倉田先生がおっしゃったように、先生方がせっかくある文化施設やいろんな文化的な催しをどんどん利用するようにしていただく、その利用の仕方を勉強していただくことがあると思います。たとえば美術館にいらっしゃっても結局先生はほとんど何も説明なさらない。「この絵はどういうものですか」と尋ねると、「それは君たち自分で考えろ」とか「よく見ればわかる」とか（笑）。そういう面もあると思いますが、やはりもう少し「これはこういうことなんだよ」とおっしゃって、「しかしながら見るのは自分たちの目で見ろんだよ」とおっしゃればいいんです。やはりそれだけ関心を持って勉強していただいて、そして子供と一緒に考えているというような態度をとっていただかないと、せっかくそういう施設ができ、そういう催し物があっても子供たちに十分浸透しないんじゃないだろうかということです。

それから、地方への注文ということでございますが、日本には非常にたくさん公民館があり、その公民館というもの

が現在地方の文化活動の一種の拠点だろうと思ふんですけれども、その拠点が社会教育施設だという一つのレッテルがあるために、何か少し文化的な面の方を遠慮していらっしゃるというところがありはしないか。まあ公民館という名前もそろそろもう少しびびったりくるような名前に変えて——「文化館」でもいいですが、——新鮮味のあるものにした方がいいんじゃないか。答申でも文化と社会教育は特に区別しないで使っておられるわけですから、地方の中心点としての公民館を文化面で大いに活用するようにしていただいたらどうかと思います。

高石 どうもありがとうございました。どうやらそれぞれの角度からの御意見もいただいたようでございますので、時間もまいりましたのでこれで終わりたいと思います。きょうはお忙しいところ大変ありがとうございました。



あとがき

▼出張で梅雨明けの空を九州に飛んだ。しばらくの間夕陽にまばゆい輝きを見せていた海は、一面の雲の大陸に覆われて姿を消した。空の旅の経験浅き眼は窓の外、夢幻の世界に釘付けになる。白い雲の世界は、ある時は雪に覆われた森のようであり、大きな樹木のように雲が下から生え上がってくる。ある時は白い砂漠のようになだらかに広がり、またある時は流水に閉ざされた北の海のような厳しい表情を見せる。夕焼けは一条の茜色の帯に凝集してすぐに消えてゆき、機体はしんとした闇に包まれる。

やがて、飛行機は眼下の光の塊り目にかけて降下する。大きな音をたてて機体は空港の地面にしっかりと受けとめられた。放浪の子再び母なる大地に抱かれる、といった大げさな感懐のひとつも湧く。降り立つと、滑走路は夕立に潤っていた。

▼第十一期中央教育審議会は、任期切れ直前の六月八日、「地域社会と文化につ

いて」を答申し、また今期の長期テーマの生涯教育の問題について「生涯教育に関する小委員会」が報告を提出した。本号では、この中教審答申・報告を契機として、地域社会において文化や生涯教育をどう振興させていくかを考えるための特集を組んだ。

「経済中心の時代から文化重視の時代へ」という現状認識あるいは政策目標が、大平首相の施政方針演説をはじめ、最近各方面で言われるようになった。一方、地方の時代と言われるように地方重視の動きが生まれている。中教審答申は、このような潮流を的確に踏まえ、国民の文化活動が展開される場である地域社会との関連を重視して、文化活動を盛んにするための様々な視点を提供している。その中には「文化活動圏」という画期的な考え方も含まれている。

また、小委員会報告は、人々の生涯の各時期における多様な学習機会を用意することの必要性を述べ、そのための基本的な課題を示している。

本号ではこれらの答申報告で示された

論点について理解を深めていただくために諸先生に原稿をいただくとともに、幾つかの県や市に、実際に文化、生涯教育の振興をどのように図っておられるか具体例を紹介していただいた。また、地方の文化振興の問題も含めての大きく日本の文化の現状や将来についての座談会を掲載した。答申・報告と併せて施策の推進の上で大いに参考にしていただきたい。

MEJ 63 第31巻 第4号 教育委員会月報

省 文 部 権 者 作 著 発 行

印刷者 東京都港区西新橋3丁目6番10号
大日本法令印刷株式会社